



アメリカ出稼ぎ記 ⑫

〈最終回〉

MY青春 USA

—番所智保—

私は6年間USAに滞在していましたが、決して長期間であったとは思いません。駐在という状況においては、小学校を卒業した程度だったのではないのでしょうか。今思えば、できたら10年くらいは居たかったなあと思います。そうすれば、USAの良い面も悪い面ももっと見る事が出来たと思います。

しかし、私の場合、大手企業の駐在でUSAへ行ったわけではありませんでしたので、自分自身でいろいろな事をやらなければなりません。そのおかげで、6年間凝縮した形でいろいろなことを経験することが出来ました。仕事で行く場合は選択の余地はありませんが、留学等で海外へ行かれるチャンスがある場合は、日本人がたくさん集まる大都市ではなく、自分自身であれこれと苦労しなければならぬ。地方を選ばれることをおすすめします。

最近、ボーダーレス(BORDERLESS)という言葉がよく使われるようになりました。情報に関しては、完全にボーダーレスの時代に入っていると思います。例えば、皇太子妃決定のニュースが日本より先にUSAで報道されたことは、ボーダーレスそのものだと思います。航空

機はAIRLINEを選ばなければ、毎日のようにUSAへ飛んでいるし、日本へも飛んで来ています。時差があるので日帰りは出来ませんが、一泊してとんぼ帰りするビジネスマンもいます。日本は単一民族国家であり島国なので、難しいところがありますが、精神面でもボーダーレスになれば、いわゆる国際人になれるのではないかと思います。

この淡路島でも、中学校や高校で英語を教えている講師の方や宗教関係の方々といった外国人が増えています。私も淡路へ帰ってきた際、その数には少々驚きました。関西新空港が完成すれば、この淡路島へも外国からのツーリストがたくさん訪れることになると思います。その時期に先んじて「ボーダーレスの島、AWAJI」とか「国際島AWAJI」というキャッチフレーズの下に、売り出してもいいかも知れません。

以前本誌に書きましたが、6年間という短期間でしたが、海外から淡路や日本を観ることを出来たことが、わたしにとって最大のプラスでした。物理的にも、精神的にも海外との距離感が無くなったように思います。また、USAでの仕事を通して、自分の意見ははつきりと言うことが身に



ついたと思います。これは度が過ぎれば、利己主義(SELFISH)にとられがちですが、国際化を求められる日本人にとっては、まだまだ足らぬ点だと思っています。

孤独に強くなったということも(自分で言うのは変ですが)、意外でした。地方事務所勤務に勤務している駐在員ならだれもが経験することと思いますが、周りに日本語を話せる人が誰も居ないという状態は、実に苦しいものです。英語を学ぶとか、その地に慣れるという点においては最適の状況ですが、長く続けば精神衛生上あまり好ましくありません。私の場合は、ポストン駐在の前半がそのような状況でした。読書と酒とTVとの付き合い合いがものすごく多い期間でした。酒に関しては、今思えばアル中に近かったなあと思います。とにかく、強い酒を異様に美

味しく感じていたように思います。先日、当時飲んでいたので同じ酒を飲んでみました。現在の味覚にはまったくマッチしませんでした。ポストン

トンでは、最初の半年間が独りの時代でしたが、結婚してからは孤独ともお別れできました。しかし、最近はその孤独感が妙になつかしく感じら

れるのは、どういう心境の変化かなあと不思議に思います。もうひとつの大きなプラスは、本当にいろいろな人と出会うことが出来たということです。アメリカ人、韓

国人、そして日本人の友人が出来たことが、目に見えぬ財産となつたと思います。また、いろいろな環境の人と話す機会にも恵まれました。ハイスクールの夜間教室で、戦争につ

いてのDISCUSIONとなり、平和の国・日本から来た私は、銃口を背に感じながら、東欧(ハンガリーだったと思います)の祖国から逃げ出して来た年配の婦人に対して、「人口が増え続けている世界において、戦争はあ

る意味では必要なんだ」とい

という極論(「暴言」)を言っていました。その婦人は激怒したようでしたが、私もその日は持論を引いたままです。しかし、翌週同じ教室でこの婦人に会った時、彼女の方から「あなた

の言ったことは全く誤っていないと思う」と話しかけられたのには、少々ショックでした。

USAに居た間は、早く日本に帰りたい、といつも思っていました。帰国後しばらくすると実に楽しくUSAのことが思い出され、ときどき地図を開いてなつかしく思っています。私は長男がUSAで生まれましたので、21歳まではUSA国籍を有しています。彼が21歳になる頃には、世界はどのように変化しているかはわかりませんが、日本が経済的にも政治的にも魅力

ら、彼にUSAへ行って欲しいというかも知れません。そうならないように、淡路に住む我々は淡路レベルで国際化を図っていなければならぬと思います。具体的にどのよう

にすればよいかははっきりわかりませんが、読者の方で何かアイデアがあれば聞かせて頂きたいです。淡路にいても、どこかでUSAとつながっていたいというのが、私の本音です。

今月号で、アメリカ出稼ぎ記も一年を経過しました。もつといろいろな書きたい事があるような気もするのですが、REFRESHする意味で、今月の寄稿をもって一区切りをつけたいと思います。次回まで、おもしろいネタを用意しておきますので、それまで、SEE YOU!!



●ポストンで長男と